
トロピカルマリンランド

ブータロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トロピカルマリナランド

【Nコード】

N2270B

【作者名】

ブーロー

【あらすじ】

短編の続編で、白鳥警部と佐藤刑事のトロピカルマリナランドでの恋物語です。もちろんライバルの高木刑事も登場するこれは白鳥×佐藤です

0 話トロピカルマリニランドに行きたい！（前書き）

白鳥×佐藤です。

0 話 トロピカルマリナランドに行きたい！

トロピカルマリナランドに誘ったのはいいんだが

いついけばいいのか

わからない．．

ハア．．．佐藤さんと行きたいなあ

でも非番の日にしか

行くのは無理だからなあ．．

白鳥警部は外をずっーと見ている。

外の景色を見ていてもうわの空。

彼の脳裏にはただ一人の

女性と一緒にトロピカルマリナランドで

デートすること以外

何も考えていなかった。

ただ一人の女性とは佐藤さんのこと。

僕はこのデートをきっかけに

佐藤さんとの愛を深めていく。

しかし唯一のライバル、高木君も
トロピカルマリンランドに遊びに来る。

僕は彼には負けない。

勝って愛を築く。

0話トロピカルマリナードに行きたい！（後書き）

続編です。

どうでしたか？苦情は聞きません。

投稿も亀ぐらい遅いです
続きも読んで欲しいです。

1話トロボカルマリンランドに誘おう（前書き）

白鳥警部中心の話です

1話トロピカルマリナランドに誘おう

トロピカルマリナランドに行きたい・・・

佐藤さんと一緒に・・・

佐藤さんに聞いてみよう！

非番の日はいつなのか・・・

非番の日じゃないと

トロピカルマリナランドに行けないからね……。

――休憩時間

佐藤さんは由美さんとしゃべっているみたいだ。

とりあえず

「ちょっと話がある」

とでも言って呼び出すか！！

僕は佐藤さんのいる方向へ向かった。

「佐藤さん・・・」

「あら…白鳥君どうしたの？」

「ちょっと話があるのでこちらに来てくれませんか？」

白鳥警部は手招きした。

「ええ……。いいわよ。

由美ごめん!!

ちよつと白鳥君と話があるんだ。

待っていてくれる?」

「美和子・・・あんたまさか、高木君をあきらめて白鳥君に変わったの?」

白鳥警部に聞こえない程度の小声でこそそそしゃべる。

「はあ……。?由美

何いつているのよ。

なんで高木君のことが出てくるわけ?」

「二人で何こそそ話しているのですか?

僕に知られたくないことですか?」

「べ、別にそんなたいしたことじゃないから

白鳥君は気にしないでいいわよ…。

さあ〜話があるんでしょ!!

あちらの休憩所で話を聞きましょう。」

佐藤刑事は白鳥警部を

休憩所まで誘導した。

「で、白鳥君

話は何かしら・・・？」

「トロピカルマリニランドに行ける日ありますか？」

佐藤さんの非番の日に行くんですよね……？」

その非番の日っていつですか？」

「いきなりだけど、明日よ。」

明日私は非番なの。」

「そうですか・・・

なら僕も休みを取りましょう。

そして明日は一緒にトロピカルマリニランドへ行きましょう。」

「別にいいけど、高木君も来るんだよね。」

「明日トロピカルマリニランドへ行くこと、

彼にも伝えといたほうがいいよね……。」

「ええ…そうですね。」

本当は来て欲しくないのだが……

高木君は佐藤さんのことに関しては

意地が悪いからなあ…

なかなかあきらめが悪いですからね……

彼も来るのですか？

高木君とは明日決着をつけなければいけないみたいですね…

まあ、勝つのは僕ですけどね

お手並み拝見させてもらいます！

高木君

後から僕は明日トロピカルマリンランドへ行くために

休暇を取りにいった。

1話トロピカルマリニランドに誘おう(後書き)

ブータロです

早速トロピカルマリニランドへ行くみたいですネ…

白鳥警部と佐藤刑事の恋の行方は？

次回へ続きます

また会いましょう

感想や評価どんどん待ってます！

では、また次会う時までさようなら

2話トロピカルマリナランドに行く前に…（前書き）

高木刑事の気持ちも含まれています

2話トロピカルマリナランドに行く前に…

聞いてしまった……

ー明日トロピカルマリナランドに行くのか……

早いなあ……

このままじゃ白鳥警部に出し抜かれるかもしれない

トロピカルマリナランドに行きたい。

白鳥警部に負けたくないから……

高木刑事は、佐藤刑事の近づいていった。

「佐藤さん!!!!」

笑顔で自分と呼ぶ高木刑事のほうを向く。

「あら、高木君……ちょうどいいところにきたね。

ねっ……白鳥君」

「ええ……そうですね。」

良くないですよ。

佐藤さん……

僕の唯一ライバルと認める高木君が

トロピカルマリナランドに誘うなんて……

「それで用件は何ですか？」

「ああ…トロピカルマリナランドに一緒に行こうっていつ話よ…」。

「僕と佐藤さんですか？」

「ううん……もちろん白鳥君もいるよ。」

トロピカルマリナランドに行くのは明日ね。」

「君も休暇をとってトロピカルマリナランドに行くつもりかい……？」

「あ、いえ行くっていったら行きますけど……え、えっとじゃあ僕は仕事をしていきます。」

高木君は、逃げたように僕の前から去った。

彼、あたふたしていますね……

「佐藤さん……」

「何？」

「明日絶対にトロピカルマリナランドに来てください……」。

「ええ……来るわよ。」

「わかりました。では仕事場に戻りましょう。
明日楽しみにしていますよ。」

あれから僕と佐藤さんは今日の仕事を一緒に行った。

仕事が終わったあとは、明日の準備のためにみんなより早く帰った。
僕は家に帰った後、ルンルン気分で明日持ってくるものの確認をする。

ああ……明日が楽しみだ

明日が僕と佐藤さんの愛の絆を深める絶好のチャンスだから・・・
トロピカルマリンランドに行きたい

2話トロピカルマリナンドに行く前に…（後書き）

次回いよいよ3人でトロピカルマリナンドに行きますヾ

＊）ゝ

感想お願いしますね（＃＾・＾＃）

byブー太郎

3 話トロピカルマリナンド入場（前書き）

1ヶ月遅れの更新になりました

次は多分2月のテスト前による更新だと思います

3話 トロピカルマリナランド入場

トロピカルマリナランドの入場門で待ち合わせ

佐藤刑事は、しつこく腕時計を見る。

「もう、何やっているのよ…。あの2人は・・・遅いじゃないの。」
少々呆れて1人でずっと待つ

はあとため息でもついている間に誰かがトロピカルマリナランドへ
向かって来る

誰なんだろうか？

興味を持ってここに>トロピカルマリナランド<来る人を見物して
いた。

さあてと、向こうで歩いているのは誰かしらね・・・

ん・・・白鳥君のようね。

「佐藤さん、待たせて申し訳ないです。まあ、それでも彼高木君よ
りは早く来ましたけど・・・」

はあ・・・白鳥君、あなたもずいぶん遅れて来たんじゃない・・・

あとは高木君だけね…

『彼は一体いつ来るのやら』と思いながら不機嫌そうな顔をしてい
る佐藤刑事

呆れ顔をしてまもなく高木刑事がトロピカルマリナランドに近づい

て来た

高木刑事は少々焦った雰囲気を漂わせてこちら《トロピカルマリ
ランド》へ走って来る。

佐藤刑事が走る高木刑事に驚いている間に高木刑事はトロピカルマ
リランドの門に到着する

「ハアハアハア……」

微妙に荒い息をする高木刑事

そんな彼に佐藤刑事は気にかける。

高木刑事を心配する光景を目にする白鳥警部は機嫌悪そうにムツと
する

「佐藤さん、すいません。遅れてしまいました。」

「もう何やっているのよ…。
本当に遅いわね…。」

「佐藤さん、本当にすいません。」
必死になって申し訳なさそうに謝る。

彼は真剣な眼差しで佐藤刑事に向かって謝る

佐藤刑事は高木刑事の真剣さがわかったかのように
『しょうがないわね……。別に怒っていないわよ。』
照れくさそうにうつむきながらぼそっとつぶやく

高木刑事とばかり話している佐藤刑事にまたその感情がおもてに
出ない程度にムツとする

ついに登場しましたね…。高木君

このトロピカルマリニランドで佐藤さんにふさわしいのはどちらか
決着をつけようではないか・・・

さあ、ここからが僕と君との勝負だ。

そして僕が絶対に勝つ！

白鳥警部は、心の内で“絶対に勝つ”と祈念してトロピカルマリ
ニランドの門をくぐった

3話トロピカルマリナンド入場（後書き）

久しぶりの更新です

これからどうなるのか

しっかりと書きたいです

感想などくださるとめっちゃ嬉しいです

byブー太郎

4 話遊ぶ前に……

……トロピカルマリナランド……
多くの人がここで楽しく遊ぶため訪れた

周りには、観覧車やジェットコースターなどがある。
とてもにぎわった空気
どこからか聞こえる派手な雑音

この晴れ晴れとした天候にふさわしい環境が出来上がっていた。
しかしその裏腹で白鳥警部は高木刑事には“勝ってやる”という一
方的なおもいがありひそかに燃えつくている
一見、平静を装った白鳥警部のもう一つの素顔が隠されている
彼は、おもての表情だけでも自信満々な感じを見せる。

白鳥警部は一旦落ち着いて心を入れ替える。

さあと、どっから遊ぼうかなあと……
こういうのもエリートの僕は考えるからね……。
佐藤さんと結ばれるためならあらかじめ計画も立てておく
それが僕のモットー何だから……

観覧車にしようかなあと……
いや、ライバルの高木君と長い時間観覧車で一緒だと窮屈かもしれ
ない
1分1秒が大切だからね……。

ライバルの彼と楽しんでいても意味はないからね…
一秒でも早く彼よりリードしないと佐藤さんと結ばれるって夢は消えてしまうなあ…。

そうだ！ジェットコースターで良いじゃないか！！

まず僕と佐藤さんと二人で乗って高木君は1人で乗らせる
ジェットコースターの席となりどおしってというのは何か発展させるきっかけになる

「ねえ…これからどこで遊ぶの？」

「えっ、えっ……」

どうしようか悩んでいる高木刑事
それに対して白鳥警部はにっと笑った。

「では、佐藤さんジェットコースターでも乗りましょうか…。」
彼は自信満々に言った。

佐藤刑事は

「ええいいけど」
と言った

この瞬間、彼の中で（やったあ）と鼓動が高鳴っていた

これからがトロピカルマリニランドで遊ぶとき
白鳥警部は影でさらにワクワクした

4 話遊ぶ前に……………（後書き）

えっと次の更新も遅れるような気がします
どうか駄文ですが見捨てないで読んでいただけると嬉しいです
でも絶対に更新はします

5 話遊び場は…（前書き）

更新遅れてすみません（――）
勉強をやっていました
これから早い更新心がけます
―― m ― 応学生の身分なのでテスト

5 話遊び場は…

…ジエートコースター…

（それで遊ぶことがめっちゃ楽しみだあ・・・）

普段の白鳥警部ならそんなドキドキ感などまったくくないがこのときばかりは胸が高鳴った。

子供に戻ったような嬉しい気分

いままで血まみれの死体を見たり血塗れた犯行現場に捜査に行ったりして苦労していたことが全部吹っ飛んでいきそう

（やっと、佐藤さんと結ばれるこのときのきっかけができた！！）

そうおもって嬉しくて嬉しくてしょうがない

今はルンルン気分だ。

なかなかうまく佐藤刑事を魅了させることのできない高木刑事に『ふっ…』とかつこよくつぶやく。

ジエートコースターはやっぱり人気がある

（並ぶのも窮屈だあ・・・

早く乗りたい

そしてきっかけを作りたい

これだけでも佐藤さんと結ばれるには序の口だからね…。）

ジエートコースターに1分1秒早く乗りたい！

このときは子供っぽい白鳥警部

だんだんと列が開いていく

（そして僕たちは列を詰める）

ジエートコースターが見えてきた。

その度に鼓動が高鳴る。

“早く乗りたい”の気持ちばかりになる

（やっとのことで僕たちの番がまわってきた）

白鳥警部の中で鼓動はもうおさえきれない

そこですかさず高木刑事が一つの席に座った。

その席のとなりは開いている

そして、その前後の席はなにやら人が座り込んでしまった

佐藤刑事となりあう席は無いかなあと見尽くしても2つ開いている一つも席はない

この瞬間白鳥警部の鼓動が一気になくなって気分がガクンとおちる。

がっかりした白鳥警部に佐藤刑事はすかさず

『高木君の隣り開いているから高木君と一緒に乗ればいいんじゃない？』と笑いながら言った。

「は、ハイ……」

本心は（なんで高木君となりの席なんだ？）思い、苦笑いして高木刑事のとなりに座った

がっかりして席に座り、溜め息をはく

まだ佐藤刑事と結ばれるには道のりがあるのだと感じ気が重くなる

白鳥警部

ジェートコースターに乗っている間もその事で気が重かった

5 話遊び場は…（後書き）

前書き同様、遅れてすみません（――） m 見苦しい言い訳ですが、テストも一部ありますけどちょっと現実逃避もしていましたでもこのサイトにはちゃんと来ていましたけど… またしても駄文ですが早い更新目指すのでこれからも宜しくお願いします（構成は八割方考えてあります）

6話ちよこつとの不満（前書き）

更新速度自分的には早くなりました
いつも更新のろくてすみません。――＊――
でも完結まで書く気があります。
遅いですけど頑張ります

6 話ちょこつとの不満

ジエートコースターからやっと乗り終えた

佐藤刑事は気分爽快だった。
ルンルン気分で歩いている

ーその一方白鳥警部が深く溜め息を吐いて落ち込んでいることなどまったく気づきもしない
ちなみに高木刑事も少々落ち込んだ様子だ

白鳥警部は2人に気付かれないようにこっそり頭を抱え込む。

（ハア、気分がモヤモヤするなあ。

佐藤さんと隣りの席に一緒に座るって計画だったのに・・・
狂ってしまったなあ……。

あのときに席が2つ開いていなかったからなあ……………。

嗚呼……僕の計画が狂ったのも今こうして僕の思考回路がおかしくなっているのもすべて高木君のせいだ！！）

心の中で一人で破綻している白鳥警部
いちおう見かけだけでも冷静沈着を装おう

太陽の光が信じられないほどまぶしい
輝かしい太陽が落ち込んでいる白鳥警部を照らす
僕には太陽が発する光がまぶしすぎて痛い

「ねえ、白鳥君？」

「さ、佐藤さんどうしたんですか？」

白鳥警部は、急に声をかけられて少々慌て気味

「白鳥君なんか様子が変よ…。」

さつきから頭を抱え込んだりしているけど大丈夫？」

「（あつ、佐藤さんに頭を抱え込んでいるところ見られてしまった
！！）

大丈夫ですよ…。」

様子が変だなんてこと僕にはありませんよ。」

白鳥警部は無理やり苦笑いをした

しかし佐藤刑事には白鳥警部の笑いは苦笑いだとすぐに気づいた

佐藤刑事は心配そうな顔に変わった。

「まったく白鳥君、無理しちゃ駄目よ……。」

気分落ち着かせる為に自動販売機で缶コーヒーを買ってあげるから
待っていなさい！！」

佐藤刑事は心配心を込めて少々キツイ口調で言った。

“缶コーヒーを買う”って言ったそのあと、佐藤刑事は走って自動
販売機へと向かった

――まさかこのあと何かのハプニングがあるとは知らないで・・・

6 話ちよこつとの不満（後書き）

えっと、この小説の作者ブータロです

本当に投稿いつも遅れてすみません

ちゃんと完結まで書きますので見捨てないで温かく見てくださると嬉しいです

評価もお願いします

評価に対する返事も後ほど返します

7 話突然の波乱

佐藤刑事は、自動販売機へと小走りで向かう。

この時は、”何か”が起こるとは予想していなかった。

事件などのせいで佐藤刑事が休憩所に戻ってこないとは思わなかった。

相変わらず計画通りに事が進行しなかった事について憂鬱だったが、佐藤刑事に励まされたことについて嬉しかった。

”嬉しさ”と”憂鬱”

同じように2つの気持ちが重なって不安定になっていた。

早く佐藤刑事が、休憩所へ帰ってくることをとりあえず待っていた。近くにいるライバルの高木刑事など気に留めなかった。

（佐藤さん、いつ帰ってくるのだろうか・・・？）

ああ、計画を失敗したという嫌な気持ちから抜けないだろうか？

こうして間にも時間は過ぎていく。もう昼になるじゃないか・・・。

）

『ハア』と手を組んで溜め息を吐く。

ベンチに座っている白鳥警部はやや落ち込んでいる気持ちが出ている。

落ち込んでいる白鳥警部の様子を高木刑事は、企む様子もなくぼーと見ていた。

「あの…白鳥警部？どうしましたか？」

さりげなく質問をする高木刑事に白鳥警部は

『なぜ、ライバルで有る僕の心配をするんだ？』と疑問を抱く。

「いや、何でもないよ」

とりあいず彼らしく冷静さを保って一言つぶやいた。

そして、再び心の中で落ち込み始める。

（佐藤さん、遅いですね

もうあれから20分ほどたちましたのね…。

自動販売機でコーヒーを買っただけでそれ程まで時間がかかるわけないのに…。

何かあったのだろうか？彼女に限って…）

白鳥警部は軽く頭を抱え込む。

”彼女に限って…”

その言葉が強く印象に残る。

そして、白鳥警部は立ち上がる。

佐藤刑事が今、何をしているのか確かめるために…

7話突然の波乱（後書き）

ブータロです

今回は更新少しは早くしました

評価など宜しくお願いします

評価の返事は明日返事します

8 話ちよつとした搜索

白鳥警部は立ち上がった。

「し、白鳥警部？」

いきなり立ち上がる白鳥警部に高木刑事は驚いてばそつとつぶやいた。

しかし、その高木刑事の声など白鳥警部には入っていなかった。

一人で自動販売機へと向かう白鳥警部。

高木刑事には白鳥警部がどこへ行こうとしているのか全くわからなかった……。

ただ、白鳥警部のあとをついていく。

背を向けた白鳥警部にひたすらついていった。

ずつとしゃべらないで自動販売機のあたりを見わたす。

”佐藤さん”はどこなのか？と疑問に思っ探す。

この広い遊園地のどこに行ったのか探すなんてかなり難しい。

――彼女も動いているから距離も遠ざかってしまう

運がよくてもすれ違って会わないだけだろう…

そんなことは頭の中で回転する。

心の中で苦渋する白鳥警部

彼はこんなときも苦しんだ自分を隠し通そうとする。

自分に”不可能”の文字などないと自信家らしい態度を取るようと

必死になる。

裏の感情を表に出ないように心がける。

（佐藤さん…。何か事件があったのだろうか？彼女がこんなに”僕”を遅く待たせているなんて有り得ない…。

何かあったとは思えない。いったい何が起こったんだ？）
頭をフルに回転して考え込む白鳥警部

背を向けたまま考え込む白鳥警部の様子を高木刑事はだまって見る
事しかできなかった。

（白鳥警部…？）

いつもと変わった様子の白鳥警部に密かに疑念を抱く。

高木刑事が密かな疑念を抱きつつも白鳥警部は周りを探し続けていた…。

8話ちよつとした搜索（後書き）

ブータロです

またまた更新遅れてすみません

本当に情けない作者でして

また遅くなりますが最後までかくので見捨てずよろしくお願いします

9 話彼女しか見えない

”佐藤さん”はどこにいるのか？

そのことだけに頭がいっぱいだった。

彼は適当に周りを見渡ししては、佐藤刑事を探し続ける。

今は、人混みのせいで周りに入り込めない状況
人混みのせいで流れる時間が迫りくる。

ざわめきの声が自分の位置までに響く。耳をおさえながらその”ざわめき”の音が聞こえる方にへと進む。白鳥警部は、人混みの中にさりげなく巻き込んでさつきとは違う刑事の顔へと変える。走っては遠くにある”何か”を求めようとする。

周りに人がいることなど気にしずただひたすら今の状況をしりたがる欲望にまみれる。

”つつい” 佐藤刑事がいる”って淡い期待をしてしまう。

「はあはあ……」

思いつきり走ったせいか妙に息が荒い
ひざを軽く抑えながら目の前の光景を目にしようとする。

彼の前の人混みは絶えない。やつとこのことで光の道^{ルート}が見つかった。
そう思い切りや即座に道は閉ざされる

ふたたび、人混みの道が出来上がる。

白鳥警部は困った顔に変わる。

頭をポリポリとかいて一瞬だけ首を傾げる。
(どうしたらいいんだ?)

高木刑事も近くにいることだけは頭に入れておいてこの状況について苦々しく思う。

”どうすればいいのか”？

”何をやればいいのか？

わからないまま時間だけは過ぎていく

行動を起こさなければと思いつつも”有言実行”にはならない
自分に対して少し苛々とする。

（こうして間にも佐藤さんは…僕の前から遠ざかっている。ああ、
日が沈んでしまう）

考えるだけむだなのにしつこく同じことを考える

いつもとは違う不安定な彼

そんな彼を近くでは高木刑事が何時間か見守っていた。

近くにいる高木刑事の存在も忘れる程に苦しんでいた。（佐藤さんはもう遠くに行ってしまっただろう。一体彼女はどこに行ったんだ？）

またしても同じことを考える

「佐藤さん…」

ボソツとつぶやきを言ったあと今まで見せなかった切ない顔へ変わる。

彼の限界の度が超えた時の不安感が一気に出た。

しばらくすると音がした。コツコツと普通の音を鳴らしていた。
その音に白鳥警部は反応する。

「白鳥君、どうしたの？」

何気なく話しかける感じの声が聞こえた
彼はすぐに前を向く

「佐藤さん……。」

目の前に存在するたくましそうな彼女のことを”佐藤さん”と呼ぶ。
今一番求めていた人物が目の前にいることに驚いた

9 話彼女しか見えない（後書き）

改めてブータローですペンネームちょっと変えました 今日私の誕生日ですゝなので明日は、遊びに行くのでサイトに来れません（；
|；）

しかも、春休み一日中勉強と言われました。今、のろのろと更新するんじゃないかった（いまさら気づいても遅いけど…

こそこそと書きます

こんな情けない私が作者ですが完結までしっかりと書きますのでよろしく願います

ちなみに、短編小説の『僕の気持ち』とかもよろしく願います
白佐の恋の準備などもあります

10 話再会には嬉しさと不満！？

「佐藤さん…」

驚きのあまりにボソツとつぶやく
驚いては硬直していた

「白鳥君…どうしたの？」

佐藤刑事は白鳥警部の顔を心配そうに覗きこむ

白鳥警部はやはりこんなところに急に現れる佐藤刑事について驚く
ことしか出来なかった

”奇跡”が起きたみたいなき登場することに疑問に思えた

「あ、あの…佐藤さんはなぜ帰ってこなかったんですか？自動販売機の方へ行ったり帰ってこなかったんですが…一体どうしたのですか？」

疲れのせいか荒々しい声をしぼり上げる。――いつもの彼なら決して出さない声を出した

「ええ、そこでコーヒーを買っていく帰りにひったくりが複数の人々のかばんを盗む姿を見かけて黙っていられなくて追い掛けていたのよ。」

そのひったくり犯はどこまでも逃げ続けて私はひったくりを追いついて一本背負いで倒したのよ。」

微妙に得意げに話す

白鳥警部は何気なく

「そうですか…。」

とつぶやく。

「そして、犯人を一本背負いでやつつけちゃって逮捕したのはいいけどそれで白鳥君たちのところに帰ろうとした時に元いた場所がわからなくて困ったのよ。まあ、その辺りをさまよっていたってことかな？」

笑い混じりで自分の事実を話す。

それにひきつられて白鳥警部は軽く笑う。

笑いの空気が2人の周りに混じる。

「あの佐藤さんずいぶんと辺り暗くなりましたね…。」

白鳥警部が急に落ち着いたようにボソッとつぶやく。

そして上を見上げる

「ええ、そうね…。」

佐藤刑事は、普通の会話の感覚で一言つぶやく。

2人の会話をやや遠くで高木刑事が聞いていることなど気にも求めていなかった。

(…………。)

警察の手帳を手にして2人の様子に何も言えない状態になっている。楽しそうな会話を交わす2人を目にしてどこかさびしげな表情で見ている。

10話再会には嬉しさと不満！？（後書き）

ブータローです

今日で終了式と離任式をむかえました。またまた更新遅らせていますね。私の場合マイペースすぎですね
もうすぐ私も三年生ですね…。

大変になりそうです。そんな話はとりあえずおいといて……さてさてちよつと決まったことがあります。後ほど言おうと思いますが…
σ（＾－＾；）高木刑事の様子がつていう感じです
ではでは、感想をいただけるととても嬉しいです

11 話談笑の中には楽しさと不満！？

佐藤刑事と白鳥警部は二人で再会を味わっていた。

その後ろに立っている高木刑事が何か思い込んだ表情をしていることには全く気がついていなかった。

（佐藤さん……）

うつむいて悲しそうに佐藤刑事のことを想う。たまたま持っていた警察手帳を握りしめる。

「もう、すっかり暗くなりましたね……。」

「そうね……。1日って遊んでいたらあつという間に終わるよね……。」

もうずいぶんと暗くなつたわね……。」

上の空を見上げてしみじみとつぶやく。

腕時計をちらつと見て今日1日にあつた出来事を振り返る。

二人は高木刑事が後ろにいることにまだ気づかないまま

「確かにもう暗くなっていますね……暗くなつたことですからもうそろそろ帰った方がいいんじゃないでしょうか……。」

寂しげな表情で二人に聞こえるぐらいの声で『帰る』ことを呼びかける。

「えっ……？」

いつもの彼なら絶対に言わない言葉

でも今日は『帰ろう』なんていいそうにない言葉をつぶやいた。そのことに佐藤刑事は疑念を抱く。

隣の白鳥警部は何も言わず黙ったまま

彼の一言で一瞬にして周りに沈黙かなりできた。

白鳥警部は笑みを浮かばせ冷静な雰囲気を漂わせる

「どうしたの？高木くん…いつものあなたらしくないわよ・・・」

”あなたらしくない”

その言葉に強く打たれる。

今まで言われたことのない言葉をいきなりグサツと刺すようにわれてショックに近いものを味わった。

手帳を持つ手がやけにしびれる。

何気なく”その言葉を”つぶやいたことにさらなるショックが倍増する。

（佐藤さんには、やっぱりわかってもらえなかったんだ…。）

高木刑事は目をとじてあきらめかえったような表情になる。

「もう…限界だから…。」

「えっ？」

佐藤刑事は高木刑事のつぶやいた言葉を聞き取るために耳を傾ける。隣りの白鳥警部は一瞬だけ敏感に反応する。

”何があつたのか”

真剣にききながら理解しようとした。

「もう白鳥警部と佐藤刑事が二人で僕を見捨てそうな気がするんです。そう思えて僕限界ですから…。」

高木刑事は今まで見たことない悲しそうな表情で二人に言葉をかけ

た。

11 話談笑の中には楽しさと不満！？（後書き）

こんばんは。ブータローです

ついに不満を打ち明けた高木刑事、これからどうなるのでしょうか？1日の時間過ぎるの早すぎ気がf^| ^:すいません。この小説についてよろしく願います

12話限界ですから・・・

「僕限界ですから・・・」

あまりの不安定化で高木刑事はグチをこぼすようになった。
いつもなら言わない言葉に白鳥警部と佐藤刑事は耳を傾ける。

「高木君・・・どうということなの？」

佐藤刑事がきつめの口調でつぶやく。
ちよつと怒ったような表情に変える。

「佐藤さん、待ってください。僕が彼と話します。」

佐藤刑事の言った言葉を無視して前に出る白鳥警部。冷静な感じを
漂わせる

夜になって暗さが増す。

暗さのせいで見にくい中、高木刑事を探す。

「高木君・・・」

「はい・・・」

今最も話しかけられたくない人物に声をかけられて不安になる。
さらに気持ちが悪く落ちていく。

「君は本気なんだなあ・・・」

「えっ・・・？」

白鳥警部は上を見上げてぼつりとつぶやく。

「君は佐藤さんを自分のものにするために本気なんだなあ…」

「そりゃあそうだけど…」

白鳥警部は佐藤さんの事が好きじゃないんですか？」

「好きだよ…」

その言葉をつぶやいた後、夜の風に当たる。

そしてまた何か言おうとする。

「好きだけど…僕みたいに卑怯な手段を取ってものを手に入れようとするやつ、佐藤さんは好きじゃないんだと思うんだ。今までだって彼女の愛を手に入れるために卑怯な手を使った。君には悪いことをしてしまったと後悔しているんだ」

まだ上を見上げて佐藤刑事に聞こえない程度の声でつぶやく。（白鳥警部…）

今まで聞いたことのない言葉を聞いて切ない気持ちに変わる。

「でも、卑怯な僕も佐藤さんの事好きなんだ…。僕がいうのもなんだけど…最後に佐藤さんは僕が高木君かどっちが好きなのか聞いてみましょう…。今度は正々堂々と勝った方が付き合っつてことにして…」

高木刑事は彼から初めて聞く言葉に喜んで

「はい、わかりました」と言った。

両者ともに佐藤刑事の方向を向く。

「何…？二人とも…」

いきなり自分の方に二人が近づいて驚く。

「あ、あのですね…」

「ん？」

何をいうのかと首を傾げる。

『佐藤さんは、僕達の二人の中でどっちが好きですか？』

この瞬間、見事にハモった。

12話限界ですから・・・（後書き）

ブータローです。泊まりで更新遅れてすみません（<―>）さてさて次は一体どうなるのでしょうか？

最終話 トロピカルマリナランド

『佐藤さん、僕達二人の中でどっちが好きですか？』
見事にハモった。二人は真剣な顔をする。

「えっ…？」

突然ストレートな質問を受けて驚く。

何を言えばいいのかわからない

佐藤刑事は、少々あわてる。

「佐藤さん、僕達二人の中でどちらを選べますか！？」
さらに大きな声で質問せめをする。
二人は返答に期待をする。

「高木君よ…。」
ボソッと照れてつぶやく。

この一言で白鳥警部は一気に気分がダウンする。
ちよっと悲しそうな顔で『ふっ』と笑う。

（やつぱり…佐藤さんは僕よりも高木君の方が好きだった…。これが本当の答え）

「昨日までの自分だね。」

・・・えっ？

「昨日までの自分は…松田君に似ている高木君の方を意識していた。していなかったというとうそになるからね…。でも、今日は白鳥君もちよっぴり良かったと思う」
すっかり暗くなった空を見上げる

「どういうことですか？」

「いなくなった私を必死探そうとしていたことよ。あの時の白鳥君私を探すだけのために真剣になってくれた。それだけでも言い切れないほど嬉しかった。そんな…白鳥君にも惹かれてしまったなあと思う。」

二人は話を真剣に聞く。彼女が黙ってから、

「佐藤さんは、僕達二人のどちらが好きなんですか？」と聞く。

「現時点では、何もわからないわ」質問せめになっているにも関わらずすんなりと答える。

「恋心はその日によって変わっていくのよ…。揺らいで成長していくの。私達が過ごした日々はまだ短いのよ…」

本当の決断は…もっと、二人を知らないとわからないわ。」

開き直ったような口調で笑った。

そして、二人が口ずさむ前にまたしゃべり出した。

「この”トロピカルマリナランド”で今日一日遊んだことが私達の恋が実るの”第一通過”だったってことよ…。本当に結ばれるのはまだ程遠いってことよ…。」

「どういうことですか？」

また同時に質問した。

「もう帰りましょ。遅くなったし……。明日は、もう仕事よ……。」
佐藤刑事はとつとと歩く。そして「トロピカルマリニランドから外へと出る。」

「「ま、待ってください。」」
二人はあとを追いかける。

佐藤刑事はどちらが好きかとまだ決断を下さなかった。
しかし、今まで眼中になかった白鳥警部も佐藤刑事は好きになった。
そのきっかけは”トロピカルマリニランド”で遊んだこと
――まだこの恋は第一通過に過ぎない

でも、未来は恋は愛となる。それを信じて3人はトロピカルマリニランドを退場した。

――いつか恋はかなう。
そう信じて

最終話トロピカルマリナンド（後書き）

ブー太郎です。とりあえず此で最終話です。この後に続編を書きます

しかし、かける時間があるかは不安ですけど……。

でもいつかは投稿します

さて決着はつくでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2270b/>

トロピカルマリンランド

2010年10月12日14時44分発行